



関西大学

大阪都市遺産研究センター

Newsletter

No. 5 2011 年 10 月 31 日

目次

秋の国際シンポジウム「青春と戦争の惨禍 大阪日赤と救護看護婦」	1
ナレッジキャピタルトライアル 2011 に出展	2
関西大学ミュージアム講座「なにわの文化遺産 (6)」	3
近代大阪の工場に関する調査	4
新刊紹介	4

秋の国際シンポジウム「青春と戦争の惨禍 大阪日赤と救護看護婦」

平成 23 年 10 月 1 日（土）、千里山キャンパス第 1 学舎 1 号館千里ホールにおいて、「2011 大阪都市遺産 秋の国際シンポジウム 青春と戦争の惨禍 大阪日赤と救護看護婦」を開催した。

このシンポジウムは、大都市大阪の都市景観の変遷を「形」と「心」の両面から解明するという当センターの研究活動の一環として開催するもので、西日本最大の日赤大阪病院救護看護婦養成所に学んだエリート看護婦たちの青春と戦争を、大都市モダン病院の歴史とともに、戦前・戦中・戦後にわたって報告した。その後、パネリストによるディスカッションを行い、大阪の救護班と日本統治下の台湾人看護助手についてさらに考察を深めた。

基調講演は、大谷渡氏（関西大学文学部教授 / センターサブリーダー）が行った。タイトルは「帝国の落日を背負って—野戦病院と遺芳録から—」であった。

大嶽康子『野戦病院』は、主婦の友社から 1941 年 7 月に出版された書籍である。大嶽康子は日赤の救護看護婦であった。同書には応召と陸軍病院への赴任、広東に派遣され現地での勤務について記されている。『野戦病院』は戦時下の出版であるため、具体的な部隊名や救護班名は伏せられているが、当時の広東における陸軍病院の実態を知ることができる貴重な資料である。

日本赤十字社刊行の『遺芳録』には、日中戦争と太平

洋戦争の殉職者の記録が収められている。戦没者一人ひとりの記録が、顔写真とともに各支部ごとにまとめて掲載され、これによって各戦没者の生年月日や救護班召集歴、移動状況、派遣先、死没までの経緯を知ることができる。

大谷氏の基調講演は、こうした資料を丹念に調査・研究することで、救護看護婦の実態に迫ろうとするものであった。

国際シンポジウム第一部では、3 名のパネリストによる報告が行われた。

松近昌子氏（大阪赤十字看護専門学校副学校長）の報告は「100 年史編纂に携わって」と題するものであった。松近氏は、自らが大阪赤十字の関係者として 100 年史





の編纂に携わった経験から、大阪赤十字社の歴史を、設立から戦時中、戦後にわたって写真等の資料を紹介しながら講演した。

橋寺知子氏（関西大学環境都市工学部准教授／センター研究員）の報告は「昭和初期の日赤大阪支部病院—東洋一のモダン病院の誕生—」と題するものであった。日本では明治期以降に様々な分野で近代化が進められた。その過程で残された建築物は「近代化遺産」として価値を見出され、保存される事例が増加している。かつて大阪にあった日本赤十字社大阪支部病院も、そうした近代化遺産としての価値を持つものであったが、病院という機能を優先される種別の建築であるため、現在はずり取り壊されてしまった。橋寺氏の報告は、日本赤十字社大阪支部病院の建築を、写真や図面等から復原し、東洋一の規模を誇ったモダニズム建築について語るものであった。

笹川慶子氏（関西大学文学部准教授／センター研究員）の報告は「日赤の『戦ふ女性』—映画法と文化映画—」と題するものであった。笹川氏は、戦時下に製作された映画の特徴として、女性の描き方が変化し女性を主人公とする、いわゆる女性映画が増加してくることを挙げた。そうした映画の中から看護婦の活躍を紹介する映画『戦ふ女性』（1939年）を取り上げ、映画を通じて1939年がどのような時代であったのかを浮かび上がらせ、戦時色の濃さを増しつつある日本の中で、映画が国民の統



制に利用される動きが読み取れることを示した。

休憩をはさんだのち、国際シンポジウムの第二部が行われた。第二部では2名のパネリストが報告をおこなった。

葉蔣梅氏（よう・しょうばい、台湾一陸会副会長）の報告は「広東派遣台湾人篤志看護助手の青春」と題するものであった。葉氏は日本統治下の台湾に生まれ育ち、台湾総督府の海外派遣看護助手として活動した。報告では看護助手の訓練を経て広東へ派遣されるまで、そして終戦後に現地に残り残され、昭和21年4月になってようやく台湾に帰るまでの体験を語った。

増田周子氏（関西大学文学部教授／センター研究員）の報告は「火野葦平『広東進軍抄』の成立と『従軍手帳』」と題するものであった。戦時中、軍の報道班勤務であった火野葦平は、戦地で詳細な「従軍手帳」を書き、その後『広東進軍抄』という小説を発表した。「従軍手帳」は平成23年になってようやく公開された新資料で、増田氏の報告はこの「従軍手帳」を読み解きながら、戦地の様子を追体験するものであった。

パネルディスカッション「広東陸軍病院の跡を訪ねて—大阪の救護班と台湾人看護助手—」では、平成23年8月に広東にて実施した現地調査の成果をもとに、広東陸軍病院の跡地や当時の写真を重ね合わせながら、大阪の救護班と日本統治下の台湾人看護助手について議論を交わした。

ナレッジキャピタルトリアル 2011 に出展

現在 JR 大阪駅の北に広がる約 24ヘクタールの開発区域に、2013年の竣工を目指して、オフィス・商業地区・ホテル・住居といった多様な都市機能を複合した施設「グランフロント大阪」の建設が進められている。「グランフロント大阪」の中核施設として、国際的な情報・人材の集積・交流地点を形成し、新たな知的価値の創出

を目指す「ナレッジキャピタル」がおかれる。

そのナレッジキャピタルの竣工に先行するイベントとして、「ナレッジキャピタルトリアル」が開催されている。今年度は8月26日（金）から28日（日）の3日間にかけて、堂島リバーフォーラム（大阪市福島区）で「ナレッジキャピタルトリアル 2011」が開かれた。

ナレッジキャピタルトライアル 2011 では、本研究センターから、可視化チームの林武文氏（関西大学総合情報学部教授/センター研究員）と井浦崇氏（関西大学総合情報学部助教/センター研究員）が大阪都市遺産の可視化に関する研究成果を出展した。

林氏が出展したのは、大正年間の道頓堀の景観の復元 3DCG である。この CG は、これまでも第 2 回大阪都市遺産フォーラム等で公開されてきたが、今回はさらに 3D プロジェクタを利用し、専用のゴーグルを使うことによって立体視が可能なコンテンツを発表した。さらにゲームコントローラを用いて道頓堀の中を自由に歩き回れるようにし、チェックポイントを通過することで様々な解説やクイズを体験できるようになっている。この CG の出展にあたり、大正期の道頓堀の景観について



の解説を和住香織（関西大学大阪都市遺産研究センター R.A.）が行った。

井浦氏が出展したのは、「豊臣期大坂図屏風」の景観解説のデジタルコンテンツである。平成 23 年 7 月 16 日に開催された国際シンポジウム「再び「豊臣期大坂図屏風」を読む」で発表したコンテンツの中から、景観解説の部分を出し、改良を加えたものである。このデジタルコンテンツは、24 枚のモニターを連動させ 1 枚の大画面として扱う、高解像度タイルド・ディスプレイで表示されるようになっている。また手元の携帯端末を使用して閲覧者が自由に画像の拡大、縮小、移動が可能になっている。このデジタルコンテンツの出典にあたり、屏風に描かれた景観の解説を内田吉哉（関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員）が行った。



関西大学ミュージアム講座「なにわの文化遺産 (6)」

本センターでは、関西大学博物館・関西大学社会連携部地域連携センター・本センターが共催する平成 23 年度の「関西大学ミュージアム講座」で、「なにわの文化遺産 (6)」を開催した。「なにわの文化遺産 (6)」は全 3 回の講座で、第 1 回は櫻木潤氏（関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員）が「吹田の文化遺産—歴史を中心に—」（10 月 17 日）、第 2 回は橋寺知子氏（関西大学環境都市工学部准教授/センター研究員）が「吹田の文化遺産—建物を中心に—」（10 月 24 日）、第 3 回は黒田一充氏（関西大学文学部教授/センター研究員）が「吹田の文化遺産—祭りを中心に—」（10 月 31 日）という内容であった。

櫻木氏の「吹田の文化遺産—歴史を中心に—」は、古代から近世にいたる吹田の歴史をたどるものであった。現在でも吹田は高速道路や鉄道が行き交う交通の要であるが、交通の要衝としての吹田の歩みは、奈良時代の高僧行基によって踏み出された。近世以降は大都市大坂の

近郊として多くの文人たちが訪れ、豊かな文化が育まれた土地でもある。これらの歴史をたどり、吹田の地を行き交った人びとについて論じたものであった。

橋寺氏の「吹田の文化遺産—建物を中心に—」は、吹

平成23年度
関西大学ミュージアム講座
総合テーマ：なにわの文化遺産(6)




第1回 10月17日(月)	吹田の文化遺産—歴史を中心に—	関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員 櫻木 潤
第2回 10月24日(月)	吹田の文化遺産—建物を中心に—	関西大学環境都市工学部准教授/センター研究員 橋寺 知子
第3回 10月31日(月)	吹田の文化遺産—祭りを中心に—	関西大学文学部教授/センター研究員 黒田 一充

開催日 平成23年10月17日(月)・10月24日(月)・10月31日(月)
 場内料 10,000円(12:00~19:00)
 定員数 吹田キャンパス150名/入館無料遺産研究センター1階セミナー室
 申し込み 一般社会人
 申し込み 100名
 定員満了 1,000円(全3回分)



共催：関西大学博物館・大阪都市遺産研究センター
 関西大学社会連携部 地域連携センター
<http://www.kansai-u.ac.jp/units/kuks/kukscenter/>

田市に見られる近代以降の建築に関するものであった。吹田には、明治期以降の近代化の中、先進的なビール工場が建築され、また北部は郊外住宅地として開発され、大学などの文教施設も充実してモダンな町が形成された。高度経済成長期には千里ニュータウンが造成され、万博が開催されるなど、住民の暮らしが大きく変化した。橋寺氏の講演は、こうした吹田の建築は町並みについて、近現代を中心に述べたものであった。

黒田氏の「吹田の文化遺産―祭りを中心に―」は、吹田市の祭りに関するものであった。吹田市内には、吉志部神社のどんじ祭りや山田伊射奈岐神社の秋祭り、山田

の権六踊りや泉殿宮の神楽獅子など、多くの民俗芸能が古くから伝えられている。本センターでは、関西大学の重点領域研究助成を受けて小学生向けの副読本教材「吹田の文化遺産」を作成した。黒田氏の講演では、副読本教材「吹田の文化遺産」に収められた写真や映像を使って吹田の祭りや民俗芸能を紹介し、儀礼の意味や民俗芸能の特徴を解説した。あわせて、昨年40年目をむかえた、高度経済成長期最大のイベント、日本万国博覧会についても述べた。

近代大阪の工場に関する調査

大阪が近代化してゆく過程で、さまざまな工場が建設され、煙突の立ち並ぶ景観が形成された。「東洋のマンチエスター」と呼ばれた工業都市大阪の景観は、大阪の都市遺産を研究する上で重要な意味を持つ。

現在、大阪都市遺産研究センターでは、大阪の工場に関する統計資料の調査を進めている。調査をしている資料は『大阪府諸会社製造所及銀行表』（大阪府内務部第二課刊）、『大阪府諸会社工場及銀行表』（大阪府内務部第五課刊）、『工場通覧』（農商務省商工局工務課刊）等

である。これらの資料をもとに、工場の名称・営業種別・所在地名・創業年月・職工人員などを抽出し、データ入力する作業を行っている。調査対象期間は、明治20年代から昭和初期までを予定している。

これらの調査によって得られたデータは、現在作成が進められている、地図をベースとする2次元CGの上に投影することで、大阪都市遺産研究の成果を可視化することが可能である。

新刊紹介



この度、本センターより研究誌『大阪都市遺産研究』第1号が刊行された。大阪都市遺産の研究に関する論考、本センターの彙報等を収録している。

大阪都市遺産研究 第1号

発行所：関西大学大阪都市遺産研究センター

発行：平成23年6月30日

版型：B5版、74ページ

関西大学大阪都市遺産研究センター NewsLetter No. 5 2011年10月31日発行

発行・編集 関西大学大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06-6368-0095 FAX 06-6368-0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/osaka-toshi/>

mail osaka-toshi@ml.kandai.jp

